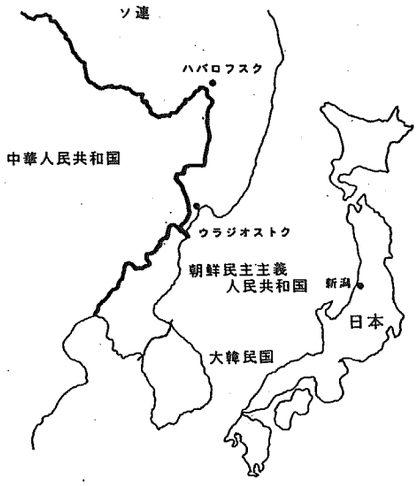
ソ連極東の旅 その1

ソ連極東最大の港湾都市ウラジオストクへの一般日本人の受け入れが、この五月、戦後初めて実現した。このツアーに、新潟市長を団長とする新潟代表団の一行として、参加した。一週間という短い滞在であったが、垣間見たウラジオストク市などの素顔を少しでも紹介できればと思い、ペンをとらせていただいた。（土田宏企画開発課長）



ヨーロッパ的港町 ウラジオストク

ウラジオストク市は人口六十四万人余を有するソ連沿海州の首都である。古くからの軍港であり、また、極東最大の漁業基地として全ソ連の四分の一の漁獲高を誇る港でもある。海外貿易港としても、世界六十か国、三百の港の船舶が出入りする国際航路の基地である。

ウラジオストクが戦後初めて日本人を受け入れる今回のツアーは、ペレストロイカによるソ連極東地域の経済的自立に向けての開放政策と、それに呼応した新潟県・新潟市など関係者のなみなみならぬ努力によるものと聞いている。

新潟市長を団長とする訪問団は、新潟～ウラジオストク間の定期航路の開設、ウラジオ港との姉妹港提携申し入れなど、数々の課題と期待をになって出港した。日本海側の拠点都市である新潟市にとって、多数の競合都市にせり勝っての新潟港からの出港であり、意義深いものがある。

海から見たウラジオストク市

ウラジオストク港に到着

訪問団を乗せたソ連訪問船ルーシ号は、五月十五日正午、新潟港の中央埠頭を離岸した。翌十六日の午後七時（現地時間）に予定通り金角湾に入港し、午後八時、無事、中央桟橋に着岸。岸壁では、市民あげての歓迎セレモニーが催されていた。

午後八時半から下船が許された。市当局がさしむけてくれたバスに分乗し、さっそく夜の観光に出発。案内された中でも、港の夜景の素晴らしさには圧倒された。また、夜のとばりが降りるのが遅いせいか、一般市民は十一時過ぎまで散策している姿が見られた。我々が思った以上に市民生活は自由であるとの印象を強くした。

我々も結局、十二時過ぎまで市内を見学し、外国人向けのホテルは市内にまだないため、入港第一夜をまたルーシ号のキャビンで過ごした。

翌十七日も前日同様、市当局の用意したバスで昼の市内見学。

通訳がいないとのことで、国立極東大学の学生たちが、三日間の休暇をとって、市内の全行程を案内してくれた。

また、日本人観光客の受け入れが初めてであるため、大変な気の使い方を示してくれた。我々の観光バスをパトカーが先導してくれ、一般車を停車させて、我々の通行を優先させてくれた。これには一同、たいへん恐縮した。

異国情緒の街と市民生活

ウラジオストク市は、帝政ロシア時代から重要港湾都市として開かれた古都で、自然に恵まれた入江の港街だけに、段丘の上に形成された街並みはヨーロッパ的雰囲気のただよう美しい景観を見せている。緑豊かな街路樹のある車・歩道はゆったりと広く、市街地のどこからも港が一望できる。整然としたたたずまいは、旅する者の心をなごませ、異国情緒たっぷりで、ロマンと旅情をかきたててくれる。将来、ウラジオストク市が観光開放策を実現すれば、このヨーロッパ的な美しい街はエキゾチックな観光地として、きっと若い日本女性のあこがれの街になるのではないかと感じた。

軍港とはいえ、道行く市民の表情は意外に明るかった。服装も洗練されており、特に女性がきれいに着飾って散策しているさまは、この地がソ連極東の一地方都市かと我が目を疑った。

ウラジオストク市街

交通機関は路面電車、バス、トロリーバス等が主体である。自家用車の普及はまだ少ないが、日本製の中古車が意外に多く走っている。

市民の往来は活発で、活気に満ちている。しかし、一般市民の食料品は、日本と比較にならないくらい品数は少なく、生活物資は十分とはいえない状態であった。衣類も勤労収入に比して高価という印象を受けた。特に高級衣料品や家電製品は相当に高いルーブル価となっており、その面では日本の消費生活とかなりの差が感じられた。

一般市民の住宅は大部分アパートで、家族数に応じて部屋数が決められているというが、増加する人口に対応するためか市外地には高層アパート群が建設されつつあった。

黒埼町の今昔

黒埼町の風呂屋(十)

茶の間に番台というユニークなつくりの「大谷下駄屋の風呂」。

「平太の風呂」は、豊田徳一さんの屋敷の、現在は作業所になっている所にあった。

真ん中の店で昼間はばあさんが娘さんたちに縫物を教え、その両側に男女に分かれ風呂の入り口があった。そこを入ると番台があり、そこから脱衣所、風呂場ともに男女に分けて仕切りがされていた。

湯船も真ん中で仕切られていたが、湯の流通のため仕切り板が底から三、四十センチくらいあいていた。そのため、酔っ払った男客などがお湯の中にもぐって女湯の方へ足を伸ばし、女のひとたちをキャーキャー言わせていることがよくあったという。

◆「平太の風呂」の廃業まで

入浴に来るのは近所の人たちばかりだった。混むのは夕食が終わってしばらくしてから九時すぎころまでで、一軒の家から五、六人もがいっしょに来るので、風呂場が満員になることがよくあった。

風呂の中から「あっちゃぇろー」と声がかかると、バケツでドドドーッと水をうめ、「いいろー」と言われると水を入れるのをやめた。

最初は湯船も洗い場の床も木製だったが、大正の終わりころにどちらもコンクリートに改装した。

商売もわりあい順調だったが、昭和三年に自噴のガスがとまり、その周囲に何本も井戸を掘ったが遂にガスが出ず、風呂屋の営業をあきらめ、廃業した。

◆「大谷下駄屋の風呂」

木場上組の大谷仁一さんの家は、昔から「下駄屋の風呂」と呼ばれて、村でも古くからの風呂屋と言われてきた。

下駄屋といわれたのは、以前、下駄商を営んでいたからで、木場や大野では風呂屋よりもむしろ下駄屋の方が通りがよかったようである。

「下駄屋の風呂」がほかの風呂屋と大きく違ったところは、風呂が住居と別棟でなく本家の中にあったということである。（図面参照）

男女に分かれた入口を入ると茶の間で、そこに番台があった。茶の間から板戸を開けて入ると畳敷の脱衣場だったが、ここは男女の仕切りがなかった。

浴室（洗い場）は男女に仕切られており、湯船は男女とも六尺に五尺くらいの大きさのクサマキ（木製）のものが二つくっついて作られていた。上は壁で仕切られていたが、湯船の中は湯の流通をさせるためか、男女の境に木製の格子がはめられていた。その格子は掃除の際の利便のため取り外せるようになっていた。それで「平太の風呂」と同様、酔っぱらいが境の格子をとりはずして、女湯の方に入って大騒ぎしたりしたこともあったという。

◆木場でのガス井戸の始まり

木場にガス井戸が開発されたのは明治四十二、三年ころで、下組の佐藤勇吉商店と川前にあった山際材木店がその始まりという。

大正期に入ると地主の家庭用や風呂屋の営業用などにポツポツとガスがつかわれるようになった。

「下駄屋の風呂」もそのころからガス井戸に変わり、湯船にガス水を入れ、天然ガスで湯をわかすようになった。（それ以前は、前を流れている用水堀から桶で水を湯船に汲み入れ、薪などを使って湯をわかしていた）

「下駄屋の風呂」では、客が混み合う時には茶の間も休み場として解放したため、特に地域の人たちに親しまれていたものと思われる。

この「下駄屋の風呂」も、昭和三年ころからガスの出がだんだん悪くなり、周囲に何本も掘ってみたが自噴せず、とうとうとまってしまった。

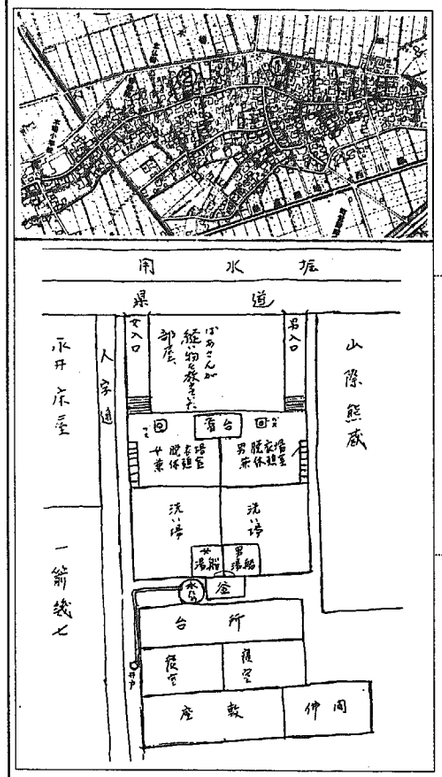
なんとか営業を続けたいものと薪を使って湯をわかしたりしてみたが、遂にあきらめ、営業を断念した。

さて、この「下駄屋の風呂」は木場でももっとも古くからあった風呂屋だった。

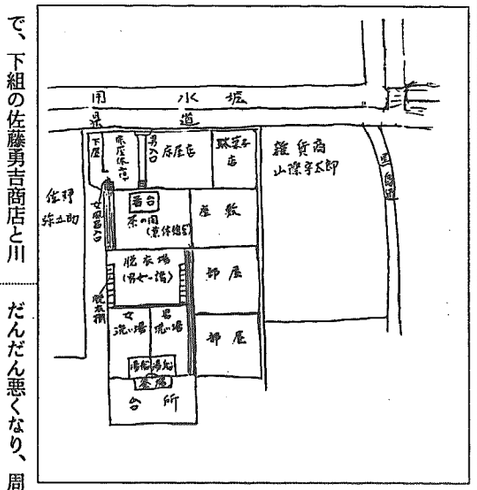
風呂屋の営業を始めたのがいつごろかはわからないが、最近、木場元庄屋の山際精爾さん宅からでてきた古文書によると、明治七年にはすでに風呂屋を営んでいたことがわかるのである。

取材協力・「平太の風呂」…豊田徳一、「大谷下駄屋の風呂」…大谷仁一（敬称略）

執筆・宮田栄門



上／「大谷下駄屋の風呂」（①）と「平太の風呂」（②）の位置　下／「平太の風呂」の平面図



「大谷下駄屋の風呂」の平面図。客は茶の間を通って洗い場へ入る（本文参照）